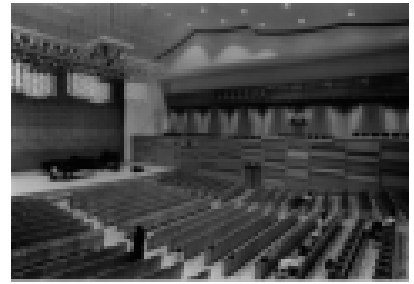


ジャズメンと子どもたち

市民運動が生みだした Jazz Month In 旭川



大雪クリスタルホール音楽堂

北海道旭川市。北海道のほぼ中央、上川盆地に位置し、札幌につぐ道内第二の都市である。旭川市には、市民の力が結集して作られたいくつかの建造物が点在する。外国樹種見本林の入り口に建つ、1998年6月オープンの三浦綾子記念文学館。また、そこから程近いところには、市民の力が大きな原動力となって作られた、北海道初の音楽専用ホールをもつ複合施設「大雪クリスタルホール」がある。

1998年10月、ここ旭川で「ジャズ・マンズ・イン・旭川」というイベントが行われた。これは、大雪クリスタルホールを中心に、世界的ビブラホン奏者ゲーリー・パートンを初めとする国内外の一流ジャズ・プレーヤーを集め、1995年以来毎年行われている音楽活動である。市民に広く音楽を楽しんでもらうためのジャズ・コンサートに加え、子どもたちに音楽の楽しさを知ってもらうことを目的とした、学校訪問、障害児音楽教室、ジュニア・ジャズ・オーケストラなど、ジャズメンと子どもたちの交流が様々な形で行われている。有名ミュージシャンを集めたこれらの催し物が、なぜここ旭川で実現したのか。ジャズ・マンズにかかわる何人かの方にお話をうかがった。

■大雪クリスタルホール

旭川市民の間に、旭川市に本格的音楽ホールを、という市民運動が高まっていたのと時を同じくして、旭川市も文化事業の一環として市民生活における文化の拠点を、と考えていた。当初の第3セクターでという計画は挫折したが、市が建設を請け負うことになり、1993年総面積26,000m²の敷地に、博物館、国際会議場、音楽堂を合わせもつ複合施設が完成した。だが、専用ホールの運営としては行政的な人員配置になり、ノウハウをもった人も少なかったため、市民への広がりに限界があった。そこで、市民運動をしてきた「ぬくもりホールの会」*が中心となって、ソフト的な部分で協力できるのではないかということから、市と市民の協力が始まった。

■ジャズ・マンズの実現

この音楽ホールの本来の目的は、音楽文化を育てること、音楽を通して市民の交流をはかること、特に21世紀に向かって子どもたちの感性

を育てていくこと、そこで本当の人間らしさを学んでいってもらうことだった。ジャズ・マンズの実行委員長、村田和子さんは市民運動の最初からこのプロジェクトにかかわっている。

「クラシックは必然的に市の方でも取り組むわけですから、じゃあ私たちはジャズでいきましょう、こういうホールでもジャズはできるんですよ、ということを示したかったんです。ジャズといえばアメリカ。教育にもかかわることができ、みんなが驚くようなビッグネームということで、ゲーリー・パートンの名前が挙がりました」

ゲーリー・パートンと言えば世界的なビブラホン奏者。しかもボストンのパークリー音楽院で教育者として何十年ものキャリアがある。しかし名前を挙げるくらい誰でもできる。村田さんがすごいのは、単身アメリカに乗り込んで、突然電話をかけたことだった。日本から来ています、会ってほしい。ゲーリー・パートンの答えは、20分だけ時間がある、というものだった。1994年秋のことである。

「こういういいホールがある、ここから音楽を発信していきたい、ミュージシャンの長期滞在型にして、子どもたちの教育もしていきたい」と説明しました。おもしろそう、と賛同してくれて、再来年くらいからならできるかもしれない、という返事をもらいました」

帰国してから11月に、たまたま日本の南の方でチック・コリアがコンサートツアーをすると知った村田さんは、「チック・コリアには、ゲーリー・パートンと組んで一世を風靡したアルバム“クリスタル・サイレンス”がある。これの再現ができないだろうか、“クリスタルホール”で・・・」と考えた。マネージャーに連絡をとったら、たまたま1日キャンセルが出たと言う。ゲイリーに連絡を取ると、3日間だけなら行けるという返事だった。こうして北海道各地から集まった長年のジャズファンが、涙を流して喜ぶような素晴らしいコンサートが実現した。市はこれにショックを受けた。これでは市として何かやらないわけにはいかない。それでその次の年から自主文化事業の一環としてジャズのイベントに協力しましょう、と言ってくれた。

■ジュニア・ジャズ・オーケストラ

1998年初めて行われたのが、市内の小学4年生から中学3年までの生徒たちによる、ジュニア・ジャズ・オーケストラのコンサートだった。このオーケストラが結成されたのは同年6月。「21世紀に向けて、ジャズ・マンズの音楽活動を市民の間に定着させたい」という、音楽家であり実行委員でもある佐々木義生さんの考えが基にある。20〜30名の編成を予定していたが、市内で募集をかけると65名の応募があった。すべての生徒の熱意に応えたいとオーディションは行わず、65名のジャズ・オーケストラができあがり、毎月2回の練習を重ねてきた。

そもそもジャズになじみのなかった子どもたちが初めて本物のジャズに接したのが、ジャズ・マンズ初年度から行われている、ジャズ・ミュージシャンたちの学校訪問だった。その積み重ねが、今回のジュニア・ジャズ・オーケストラの結成につながった。

「学校の吹奏楽しかやったことのなかった子どもたちも、1時間もするとちゃんとジャズのリズムがわかってくる。その変化は、本当にすばらしいですよ。子どもたちに、ジャズを通して大きく世界に目を向けていってもらえればと思います」と、第1回めからプログラムに参加している米国のトランペット奏者、タイガー大越さんも言う。

結成記念演奏会は、ジャズ・マンズ・イン・旭川の最終日、佐々木さんの指揮のもとクリスタルホールで行われた。これに先立ち、タイガー大越さん(トランペット)他、日本を代表するジャズ・プレーヤーである土岐英史さん(アルトサックス)、向井滋春さん(トロンボーン)、深井克則さん(ピアノ)、坂井紅介さん(ベース)、海



実行委員長村田さんと総合プロデューサー佐々木さん



障害児音楽教室

老沢一博さん（ドラム）が10日間旭川に滞在し、子どもたちに仕上げの指導を行った。彼らとともに舞台上に立った63名の子どもたちは、『セントルイスブルース』などスタンダードナンバーや、深井さん作曲のカリプソ『ジュニア・ジャズ・オーケストラのテーマ』など7曲を披露した。

彼らの演奏は、そのすばらしい出来で、満員の聴衆や取材陣をびっくりさせた。この子どもたちの中から、将来世界にはばたくジャズ・プレイヤーが生まれてくるのかもしれない。

■障害児音楽教室

ジャズ・マンス2年めから行われている情緒障害児（自閉症児）音楽教室。1998年は自閉症だけではなくダウン症など異なった障害をもつ子どもたちも多く参加した。中心となってこの音楽教室を進行するのは、米国ボストンの名門パークリー音楽院の教授でもあるタイガー大越さんだ。1995年帰省中に芦屋で阪神大震災に遭遇して以来、「音楽家として何かボランティア活動を」と考えていたタイガー大越さんが参加することによって、このプログラムが実現した。

「取材の人も、テレビのカメラマンも、この教室の中にいる人はみんな参加してください。みんなが歌っているときはいっしょに歌って、手拍子のときはいっしょに手拍子をして、マイクを向けられたら、恥ずかしがらないで歌ってください。子どもたちに、みんなが応援しているんだよ、ということを伝えたいんです」と大越さんが言う。

プログラムは、自己紹介、メンバー紹介、手でしゃべろう！！、タイガーと遊ぼう、ジャズ演奏と続く。音楽教室を1回やるために、朝から何度も何度も頭の中でリハーサルを繰り返すという。「子どもたちの感受性、集中度などを考えると、僕たちの演奏の責任が大きい。すばらしいものは誰にでもわかる。バラバラとやってしまうとだめですね」

音楽の力はストレートに子どもたちに伝わっていく。最初マイクを向けられても、マイクをなめたりかじったりしているだけだった子どもが、2回めになると息をふきかけたり声を発するようになる。前半は必死で耳をふさいでいた子が、後半は耳から手を離す。何かを言おうとしてマイクを握りしめる子には、みんなで手拍

子をして何分でも待つ。

大越さん自身の楽しみは？

「結果を期待してやっているわけじゃないんです。毎年毎年子どもたちが飽きずにきてくれることで、僕たちのやっていることが何か意味があることなんだと思います。僕は、一人一人の特徴をつかみたいんですね。1時間しかないですけど、やっていて、この子が何回やったら動き出した、あの子は同じことを4回やったら踊り出したと、一人一人の特徴が出てきたときがうれしいですね」

大越さんは、ボストンでも自閉症児のための特殊訓練校「ボストン東スクール」で、子どもたちといっしょにジャズをやっている。この学校は東京都武蔵野市にある「武蔵野東学園」の提携校である。1964年北原勝平、キヨ夫妻によって設立された武蔵野東幼稚園は、創立当時より自閉症教育と深くかかわってきた。子どもの成長とともに、小学校、中学校、技術高等専修学校と発展し、国内ばかりでなくアメリカなどでも注目を集めた。ボストン東スクールは、マサチューセッツ州の要望と支援で、ハーバード大学などの教育提携により1987年に開校し、その教育効果は世界の国々から高く評価されている。

ボストン東スクールを訪れたのは、やはり震災がきっかけだったという。

「家の周りには全壊した家も多く、ご近所で亡くなられた方がいて、自分がその奥さんにご主人が亡くなっていることを知らせなければなりません。その死に顔を見ていたら、僕に何か言いたいことがあったんじゃないかという気がしてきたんです。ボストンで4月くらいまで元気が出ないまま暮らしていたときに、家のポストにボストン東スクールのコンサートのちらしが入っていたので、行ってみようと思い立ちました。それがきっかけで、今は彼らといっしょにビッグバンドをやっています」

今回の新たな試みは、ジュニア・ジャズ・オーケストラで練習している生徒たちを、音楽教室の子どもたちに紹介するというものだった。普段の生活で障害児に接する機会の少ないジュニア・オーケストラのメンバーは、子どもたちの前で一生懸命演奏した。自分たちの演奏で、子どもたちが本当に楽しそうに踊ったり身体を動かすのを見て、音楽のもつパワーを改めて実感したに

ちがない。

障害児をもつお父さんの一人は言った。「子どもが外に出る機会がありません。できるだけたくさんの子どものいるところに行って、できるだけたくさんの子どものことを体験させてあげたいと思います」

「大切なのは、継続的にこういうことができる環境をつくっていくことです。指導のできる人、ご両親の積極的参加も必要です。子どもたちもよくがんばってきたし、お母さんたちも勇気がありますよね。やらないとあつというまに年月がたつ。10年たってあの子たちが大きくなったときには、また同じように次の世代の子どもたちがいる。次々と生まれてくる子どもたちのために、社会の受け入れ体制を今作っておかなくてはならないんだと思います」とタイガー大越さん。ここでは96年の第1回音楽教室がきっかけで生まれた障害児親子の会「スモールワールド」が、2カ月に1回音楽教室を開催してきた。年間を通じて行われるこの教室が、子どもたちを大きく進歩させている。

ジャズ・マンス・イン・旭川の総合プロデューズを担当する佐々木義生さん。「3年かかってここまでできました。障害児と言われている子どもたちも、僕から見るとそうは思えません。反応が正直で、ピュアです。何が障害で何がそうでないかわからない。障害がある、ないにかかわらず、あるのは音楽だけ。本来の姿になって、開かれたものの見方、考え方で、子どもたちを含めた周りの人すべてが考えなおさなくてはならない時期に来ていると思います」

*連絡先：村田和子（代表）：
〒070-0035 旭川市5条12丁目シユロス大城604
TEL & FAX：0166-22-3567



タイガー大越さんと、ジュニア・ジャズ・オーケストラのメンバーたち